

あそ

6

2023



寄稿

亀田虎童子

めったには落ちぬ吊橋日照梅雨
もう一匹出てきはせぬか蟬の穴
もの思ふかたちしてをり蟬の殻
犬ふぐりなどとどなたが名付けしや
知恵少し足らずに老いて早梅雨
絆創膏で間に合ふ傷や夏休
老眼にほどよき処酔芙蓉

六月集

今年の花

佐藤 竹僊

大好きな蒲團抜け出てゴミ出しに

水仙を半めぐりして日の落ちし

うすらひを窓に嵌めたるやうな日日

櫻見て今年の花は見ずじまひ

葉ざくらの中でゆったり咲いてゐる

室生寺に磴をかぞへてあれは春

てのひらにありてしばらく春の雪

桐の花雨はますますに降りつづく

桐咲けるこの四五日の風つよし

ヴァヨリンの柱目のやうに春しぐれ



春の町川をつたひてくる鷗

耳もとで春風だよと風のいふ

棕櫚の花ひそかに咲いてこぼれをり

あかんぼと老のあうらと柏餅



アイドノウ

篠田純子

春愁と稲荷の小路抜けにけり

柳の芽道を訊かれて「アイドノウ」

A I の作りし滝ぞしぶきけり

銀座薄暑ギリシャ彫刻めく少年

霾天のレインボーブリッジ点滅す

三原小路に昭和な麻雀^{じゃんそ}荘春埃



冒険歩調

篠田大佳

少年の冒険歩調夏隣
花の雨童の影の笑ひけり
童謡の揺れて園舎の遅桜
道行けば黄砂のかけら噛みにけり
A Iのおためごかしや花は葉に
春雨やお前に何がわかるのだ
約束の日に手紙来ぬ夏隣



蝶の昼

須賀敏子

梅香る村の外れに登山道
斑雪今日登りしは釜戸山
初めての写経終りし蝶の昼
花を待つ土手すつきりと草刈られ
まだ細き枝を剪定さくらんぼ
春の雪都心は何時も工事中
侵略のニュースばかりや春炬燵
はれやかに咲月高校卒業す



銀座シックス

都築繁子

マネキンの動き出しさう春の街
それぞれのクレーンが主張春の空
カラフルなふはふは遊具若葉風
目に青葉赤ちゃん乗せし乳母車
AIの滝を見てをりビルの午後
浮遊する人型アート夏近し
句友らと屋上庭園春惜しむ

立春

長崎桂子

ラジオ聞く冬山登山うらやまし
香り満つ部屋に安らぐ水仙花
和をたのしむ人たち春の喫茶店
老人のゆるゆる話す春の午後
寒もどる南岸低気圧の被害
春立つや海は譜曲を奏でをり
春に入る五体満喫白砂ふむ
風下か香りただよふ野梅かな



雑詠

森なほ子

鳥曇銀座の空の広きこと
見下ろして屋上ばかり銀座の春
銀座シックス一枚の滝内蔵す
屋上に混み合ふ木々の若葉かな
屋上に桜蕊降りすぐ掃かる
永き日のマネキン回りつつ欠伸
春陰や地価高き街の裏通り
銀座シックス銀座の大き植木鉢

銀座吟行

赤座典子

国際色豊かに憩ふ春の苑
青き踏む母子も一人もカップルも
屋上に苗床の棚隙間無し
蒼穹に白を抜げる躑躅花
みはるかす浜離宮の松春の色
ゆらりゆらり小手毬揺らす日の光
春闌くるパフェは玻璃の皿の上
日本語を銀座で探す啄木忌



銀座シックス

秋川泉

霧や天にぬけたるビル谷間
マネキンの回る回るの春の街
異国語と桜しべ降る中にあり
新緑やふはふはの服くるくると
貴婦人のほほふくらませ春帽子
目まひして音無き灌の人工美
花水木枝いっばいに風を受け
花粉症ミモザの大枝川にたれ

銀座

七郎衛門吉保

先行くは銀座ファッション花あやめ
鳶の槌春の銀座に杭を打つ
玻璃の壁銀座のビルに春景色
屋上の植木回廊風ぐるま
椿寿忌や老舗名残の朱の鳥居
銀座シックス華語も黄砂も賑賑し
銀座春クレープシユゼットのランチ
吟行に艶な着物や糸柳



潮の香のつかず離れず干鰯 亀田虎童子

α

冬をはる黄になるまへに渡らねば 佐藤 竹僊

遠霞瀬戸の小島のカフェオーレ 七郎衛門吉保

腿トンと叩き一步を春塵へ 篠田純子

柳の芽ひと雨に伸び晴に伸び 篠田 大佳

旅人の笑みの寂しさ春夕 須賀敏子

花冷や魔羅寄りかかる古社の殿 須賀敏子

梅香る村の外れの登山口 須賀敏子

斑雪今日登りしは釜戸山 須賀敏子

初めての写経終はりし蝶の昼 須賀敏子

まだ細き枝を剪定さくらんぼ 須賀敏子

古民家の道具に記憶日脚伸ぶ 都築繁子

友の訃や白木蓮の暮れなづむ 長崎桂子

風かすか早苗のゆるる水鏡 長崎桂子

初蝶来上下左右に植込を 森なほ子

名を知らぬ春の小川の水濁る 森なほ子

後ろから呼ばれたやうな桃の花 赤座典子

多島海すっぱり覆ふ春霞 赤座典子

岩海苔煮る島の醤油の甘きかな 秋川 泉

書き初めの天空を舞ふどんど焼き 秋川 泉

飲み干してひと息つくや寒卵 秋川 泉

雪の舞ふ闇より深き切通し 秋川 泉

出口失せ雪雪雪の切通し 秋川 泉

喜孝抄



大佛をおどろかしたる猫の恋

亀田虎童子

恋猫のあの声はすさまじいが、人間様と比べてまことおほらかでよい。この句、大佛を驚かせるほどなのだからさぞやと思はれる。それにしてもこの句の面白さは読むたびに大仏様の困惑したお顔が浮かんできて薄まることがない。

鎌倉を驚かしたる余寒あり

の高濱虚子もこの句を読まれたらさぞや驚かれることだらう。

この下石神井に越してきてから一度も恋猫の声を聞いたことがない。(喜孝)

何食べて大きくなりし鴨帰る

亀田虎童子

人間の大きさに満たない鴨の成長を想像して、栄養があるのかわからない小さな餌を食べて、どうしてこんなに大きくなるのかと、不思議に思う気持ちを詠んでいます。人間の持つ大きくなる感覚と鳥が大きくなる感覚にずれが起きて、成長とは何かと根源的な問いへ読者を誘います。(大佳)

この仔猫掴めば掴み通せさう

亀田虎童子

子猫を掴む。指先に力を入れると皮膚の向こうの指に届きそう。小さな生命の儚さ、体温や柔らかさがまざまざと伝わる。前号の子雀、今回の鴨と子猫、亀田先生の小動物の句は独特です。

(なほ子)

踏切をしづかに師走のチンドン屋

佐藤竹僊

師走の大売り出しシーズン、チンドン屋は稼ぎ時。一仕事終えた一行が次の町に移動中。ぞろぞろと、みな押し黙って踏切を渡って行く、という情景が鮮やかに浮かびました。そんな場面は見たこともないのに。なんとなくおかしくちよっと哀しい、映画の一場面のようです。(なほ子)

むかし私もサンタクロース置こたつ

佐藤竹僊

作者は昔一家団欒でサンタクロースの衣装をしていて、今は使っていないという想像をしました。置こたつは炭や豆炭を燃やして暖をとる古いこたつで、現代では防火管理上使いづらくなっています。置こたつもサンタクロースの衣装も炭をかぶって倉庫に眠っている景が想像されます。

(大佳)

滅入った日フライパンの浅蜷はぜる

秋川 泉

作者にも滅入る日があるようだ。

フライパンに浅利を入れてふたをする。しばらくしてはげる音がバツンバツンと聞こえてくる、聞いているうちにだんだん気持ちが晴れてきた、と思うのですが……。生活感溢れる句。(なほ子)

野遊びや花輪の子山羊従へて

秋川 泉

童話の世界のやうな俳句。回想の世界かもしれないが、しっかり心の中にあるものを写生した句とも云へる。私は子供たちと見た『アルプスの少女ハイジ』のアニメがこの句を読んで浮かんできた。へたはむれに若布をひろふ朝の浜◇を読んで、かの日鎌倉喜久恵・赤座典子お二方のご案内で逗子に遊んだことを懐かしく思ひ出した。(喜孝)

寒潮に挑む一艘大間沖

七郎衛門吉保

首都圏に暮らす私達、めったに見られる光景ではない。はるばる厳寒の青森に旅されて得られた、貴重な一句です。「寒潮」の語と乗り出して行く一艘。簡潔でドラマチック。(なほ子)

「さっちゃん」と吾れ乳姉妹豆の花

篠田純子

乳母というのは、前近代的なイメージがある役割ですが、作者の母は母乳が良く出たため、産後、近所で母乳の出の悪い家があつて、その家の子に母乳を与えていたようです。季語の豆の花は、回想のきつかけとして機能しています。(大佳)

母乳の代りをする粉ミルクが世に出てから乳兄弟は死語いや懐かしい言葉となつてゐる。そして、忘れかけてゐた言葉がこの俳句で甦つてきた。「豆の花」は野菜の花と見過ごすことのできぬ魅力ある花。色も形も豆の種類によつて多彩である。気取らぬ美しい花、よい季語を選ばれた。(喜孝)

万雷の拍手の生みし椿かな

篠田大佳

一瞬の静けさの後、ホールを揺るがして万雷の拍手が沸き起こる。するとどこかで次々と椿の花が開いてゆく。カーテンコールが続き、椿は満開になる。ユニークで楽しい幻想！(なほ子)

なほ子さんの鑑賞に尽きる。濃い緑の中に赤い椿が咲き誇つてゐる様子をこのやうに表現された。写生句もまだまだ読みやうがあるものだ。椿の花の方も拍手をしてゐるかに見えてきた。へ思ひ出し笑ひの吐息うららけし◇の「吐息」のはたらきに注目した。(喜孝)

下山後の十割蕎麦に花菜漬

須賀敏子

登山を終えて、麓にある雰囲気のある蕎麦屋に入ったという場面でしょうか。注文した十割蕎麦の付け合わせの花菜漬の見た目の楽しさと、ほんのり香る塩味が、運動後の体に染み渡る様子を想像します。(大佳)

ペダル漕ぎ島をめぐれば山笑ふ

須賀敏子

自転車専用の道、サイクリングロードが全国各地にある時代になった。その恩恵に預かれなかったのはなんとも悔しい。掲句のサイクリングロードは何処であらうか。「島をめぐれば」とある。もしかしたら「しまなみ海道サイクリングロード」かもしれない。島と島をつなぐ橋を海風に吹かれながらのサイクリング。島山も笑ふ気候。心も晴れ晴れとする。健康ほど良いものはない。(喜孝)

捕まらぬ詩片きらきら春の雪

都築繁子

作者は詩の題材を探し求めています。不意に舞う春の雪は輝いていて、詩の題材として心が動いたけれども、触れたら消えてしまいそうなくらい儂いもので、捕まえることができなかった……。俯瞰を強いられた詩人のもどかしさを読みます。(大佳)

梅の花 閻魔堂にも光満つ

都築繁子

私の知ってゐる閻魔堂は目が暗さに慣れるまで閻魔様が見えてこない。まして観梅の途中では尚更であらう。しかし繁子さんのご覧になった閻魔堂は梅の花に降り注いでいる光が閻魔堂にも……。 「閻魔堂にも」のにもに繁子さんの思ひやりがみえる。(喜孝)

牙返る早めの湯舟身を庇ふ

長崎桂子

卒寿を迎えられた長崎さん、おめでとうございます。ようやく春めて来ててもまだまだ寒さが戻ります。そんな日は早めのお風呂でゆつくりと、卒寿の身を労ります。日脚も伸びて、窓の外はまだ明るい。(なほ子)

牙返る蒼もじもじためらふて

長崎桂子

何の花であらう。待ち望んでゐた春になり木や草の花の開花が待ち望まれる。そんな折なんと寒が戻ってしまった。「もじもじ」は蒼の擬人化であるが、作者の春へのあこがれが現れてほほゑましい。作者の心の鮮度が「もじもじ」を引き出してゐる。(喜孝)

料峭やむかし長女の住みし街

森なほ子

「むかし長女の住みし街」の物語がいくつも想像されます。どの物語でも、娘さんが親元を離れたばかりで、上手くやっているか心配する母親の心は軸として訴えかけます。「料峭」の肌寒さに、心配の種は尽きない親心を想像します。(大佳)

曇天に声を絞りて冬の鳥

森なほ子

曇り空は冬の鳥にとっても作者にとっても一段と寒さを覚える。その寒さの中、鳥が鳴くといふより「絞り出す」声に聞こえた。生き物の厳しさ、凛々しさが見えてくる。(喜孝)

弘前の林檎しみじみ優しくて

赤座典子

掲句は、旅中の様子です。林檎の味の描写が直接的でないのに、味が想像されます。林檎は渋味もなく甘いけれども、甘すぎず爽やかで、喉の通りも良く、体にすつと染み渡る感じがします。良い林檎と想像されます。(大佳)

帰り来し庭に残雪一摘み

赤座典子

この俳句のみでは作者の意図は伝はりにくい。「銀世界」と題し八句発表されてゐる中の一句。弘前・陸奥といふ地名も詠まれてゐる。これらの七句の助けにより一句の面白さがわかる。雪国の雪をたつぷりと堪能しての我が家の庭の景。「一摘み」に作者の驚きを正確に愉快地に表現してゐる。誹諧である。(喜孝)



銀座



啄木の歌碑があり裏に「銀座の人これを建つ」と記されている。

瀧山町

篠田純子

思い出の山野楽器

篠田大佳

銀座交詢社通りに、かつてアールデコ調の瀧山町ビルディングがあり、6階のライブハウスによく通った。昭和3年(1928)竣工のこのビルは、この時すでに老朽化していて、ライブハウスの床板はギシギシ軋んでいた。生演奏の古い楽曲に、ミラーポールの影が壁を伝っていた。このビルは15年ほど前に取り壊された。銀座の旧町名については、現在銀座4丁目交差点は、私の子どもの頃は「尾張町の交差点」と言っていた記憶がある。

京橋の瀧山町の 新聞社

灯ともる頃のいそがしさかな

旧朝日新聞社前(銀座6丁目並木通り)に、石川

銀座は、昔からの遊び場ではあったのですが、遊びに行く場所は廉価な店ばかりでした。

例外的に、二〇〇〇年代の山野楽器は、ここにかないものが多く、気がつけば我が家の文化の中心でした。当時は、テレビゲームもCDも楽器も楽譜も揃っていて、上から下まで楽しめるお店でした。記憶の強いところでは、楽譜雑誌の演奏データを端末からダウンロードしたり、量販店にないテレビゲームを買ったりしていました。

ネット通販が浸透していくと、店頭在庫も減っていく、だんだんと山野楽器へ行かなくなりました。

ネット通販が浸透していくと、店頭在庫も減って

前にふらりと通ったら、売り場面積を減らして、一階二階が貸しテナントになっていました。十年ひと昔とはよく言ったものです。



あをやぎ句会

須賀敏子

銀座は地方出身の私には特別な街です。

「あをやぎ句会」は銀座で開かれています。ので地下鉄「銀座一丁目」から地上へ出ると、歩いていける人達が皆おしゃべりに見えちゃったりして。

七十代の私の楽しい一日です。

鎌倉・横浜・銀座

秋川 泉

「学校は多摩川を越えてはならない。」父が私に言っていた言葉。高野山大学入学と高野山の寺に下宿まで決めた。真言密教を学ぼうと考えていた。初めは父も納得して共に高野山に行ってくれた。しかし、学生は男子ばかりを目の当たりにして、父の考えが変わった。どの学生達も皆親切親切であった。父は娘を4年間ここに置く事をよしとしなかった。そして、父の言い付け通り、多摩川を越えることなく、ほとんど横浜で過ごした。その代り、大学生になって多摩川を越えて銀座に行った。

上品な落ち着いた華やかな銀座に心は踊った。私の青春の第一幕が開いた。銀座通いはいつも『イエナ書店』で洋書の絵本を買った。そしてレストラン『フライパン』で食事をした。先生が授業で歌舞伎座にお連れくださった。先生の大向こうの掛け声で歌舞伎の素晴らしさを知った。私の青春は鎌倉・横浜・銀座にあった。

あをキーワード俳句辞典 (よそゝら)

夜空

恋少年踊の外に夜空見る
観覧車秋の夜空を回りをる
観覧車秋の夜空をほしいまま
暮れきらぬ夏の夜空に雲白し

竹内 弘子
芝 尚子
森山のりこ
森 理和

涎

繭玉や麻の葉模様の涎掛
夏祓赤子の涎汗涙

森 理和
東 亜未

よちよち

着膨のよちよち歩き人から猿
柏餅よちよち歩む翔馬くん
陰になり鴨はよちよち水に入る

森 理和
須賀 敏子
森 理和

四つ

屋敷森固き木通の三つ四つ
引出に瓜切四つ梅雨深し
梅の実の三つ四つまるぶ芭蕉句碑
騙し繪の青梅太る四つ五つ
春がすみ貝がらひろふ三つ四つ
寄する波三つ四つ来たり海月かな
実梅挽ぐまだ三つ四つは葉隠れに
梅雨らしき梅雨と四つ組む傘を買ふ
発酵を待つ句三つ四つ春立てり
三つ四つ余花の細道風の渦

関口 ゆき
田中 藤穂
森山のりこ
芝 尚子
森 理和
長崎 桂子
斉藤 祐子
森 理和
田中 藤穂
長崎 桂子

目が四つ川中島の飾り風
一月や虎屋商標受話器四つ
四つ打ちが耳に残りて虫のこゑ
家庭菜園瓜坊の穴四つ残る
干鰯裂く思ひ出二つ三つ四つ

竹内 弘子
森 なほ子
篠田 大佳
赤座 典子
亀田虎童子

四つ足

することもなく四つ脚で冬を立つ
四つ足も遊んでみたし残る雪

佐藤 喜孝
七郎衛門吉保

四つ辻

四つ辻を揚羽と共に渡りけり
四つ辻の片かげの濃いはうへ曲る
四つ辻の地藏菩薩や春うらら

芝 尚子
定梶じょう
須賀 敏子

四谷

四谷から歩いて帰る春の風邪
少年に四谷怪談しろき夏

堀内 一郎
堀内 一郎

予定

初暦旅の予定を印しする
初暦予定を書きて落着ける
早過ぎる桜に予定追付かず
明き白に二日の予定筆下ろす
秋茄子や残り時間の予定表
急がずにこなせる予定犬ふぐり
澄む秋や予定なき日のまだ続く

芝宮須磨子
江倉 京子
須賀 敏子
佐藤 恭子
大日向幸江
須賀 敏子
須賀 敏子

寒明けや予定なかりし予定表

淀

人影を映して淀む夏の沼
淀みなきせせらぎ茨の実はさばに
花びらの淀にあつまる夕づくと
神田川淀みに逆る花筏
大阪の淀川花火ラインに咲く

夜中

いねがてに梅雨の夜中を持て余す
夜夜中影を探して熱帯魚

夜泣き

朝涼の寺に連れ出す夜泣きの子

余白

花むくげ登りつめたる吾が余白
余白とはラストシーンや白牡丹
初曆無事こそ良けれ余白の日
水中花余白の多き日記かな
古日記余白の多き日も楽し

呼ばれ

若き日は小町と呼ばれ夏衣
ハッピーと呼ばれる猫と月を待つ
エサキンと呼ばれて金魚赤かりし
雪あそび吾子とおなじ名が呼ばれ

亀田虎童子

山莊 慶子

早崎 泰江

佐藤 喜孝

芝宮須磨子

石森 理和

芝宮須磨子

佐藤 喜孝

佐藤 喜孝

関口 ゆき

関口 ゆき

芝 尚子

芝 尚子

須賀 敏子

田中 藤穂

赤座 典子

森 理和

竹内 弘子

毒なくも毒蛾と呼ばれ白日夢

先生と遂に呼ばれて茄子の花

一匹の虫に呼ばれてをるやうな

梅一枝届けて雛に呼ばれけり

特攻と呼ばれし父よ夕端居

後ろから呼ばれたやうな桃の花

呼び鈴

起居ひとり呼び鈴鳴らしおでん鍋

夜更け

ひとりある夜更けてとばぬ蛾とあそぶ
温泉の宿の炬燵に夜更けまで語る
郭公の夜更けに啼くはたのしからず
地の底に返す夜更けの星の冷
小夜更けて垂れ桜の泣きじやくる
息白し乗過したる夜更け道
強東風の夜更けの霧笛旅ごころ
木枯や夜更けに呼べば猫の鳴く
義姉の訃や夜更けの雲降りつるの
マイカーの夜更けの姿雪達磨

夜船

夢中より白川夜船たぐり寄す

木枯一号昨夜吹き過ぎし並木道

篠田 純子

堀内 一郎

森 理和

齊藤 裕子

須賀 敏子

森 なほ子

七郎衛門吉保

渡邊 友七

江倉 京子

早崎 泰江

渡邊 友七

篠田 純子

赤座 典子

長崎 桂子

秋川 泉

田中 藤穂

秋川 泉

佐藤 恭子

田中 藤穂

昨夜の雪熄みて下界の灯かな
昨夜の雨あぢさる珠を抱きつつ
昨夜の雨木犀の花地に香り
昨夜別府けさ登別去年今年
立春や鴨の啄む昨夜の豆

予報

大根蒔く明日の予報は雨らしい
予報士の満面の笑み桜さく
明日は雪予報ニュースや濁り酒
箱根山山焼く今日を雨予報
蕎麦の花洗濯日和と予報官
ゴールデンウィーク予報士縞ネクタイ
追試験明日は雪の予報かな
予報より雪多くなり都市悲鳴
うそほんと十一月の雪予報
同型の風台風と予報かな
明日は雨猛暑終ると予報官
予報凶に赤の線状秋甚雨
オリンピック終り台風くる予報
荒れ模様予報和らぎ室の花
積雪と予報の日々の燕居かな

予防

夏初め予防接種の猫籠に

井上 石動

佐藤 恭子

森 なほ子

佐藤 竹僊

森 なほ子

須賀 敏子

篠田 純子

佐藤 恭子

田中 藤穂

赤座 典子

藤野 寿子

定樞じよう

須賀 敏子

田中 藤穂

赤座 典子

田中 藤穂

七郎衛門吉保

田中 藤穂

七郎衛門吉保

赤座 典子

芝 尚子

芝 尚子

マフラーや介護予防と言ふ体操
果物も今朝温める予防かな

ラーメン

ラーメンの出前が着きし花の寺
ラーメンは父の馳走や秋深まる
ゆきすりにラーメン啜るしぐれかな
カツプラーメン急に食べたし浜屋顔
雀と食ぶラーメン靖國みたま祭

ライオン

ライオンは裏にぬますと秋暑し
象は草ライオン肉食我氷菓
三越のライオンに触れ冬うらら
うしろからライオン見てはいけません
春一番雄ライオンの猫なで声

来光

御来光あぶぐ鴉と恋猫と

ライス

大雪にカレーライスの熱も冷め
もて余す主婦の霍乱カレーライス

ライト

雪しまくライトに夢幻辨天堂
ライト消し見あげる空の銀河澄む
塀舐める探照灯の冴え返る

長崎 桂子

長崎 桂子

森 理和

堀内 一郎

木村茂登子

森 理和

篠田 純子

佐藤 喜孝

東 亜未

芝 尚子

佐藤 喜孝

大日向幸江

佐藤 恭子

河合 笑子

堀内 一郎

松本 米子

吉成美代子

篠田 純子

春待つやライトに浮かぶ白川郷
 ライトアップ更に色濃きさくらかな
 木洩日のスポットライト水馬
 センサーライト通り抜けたり猫の恋
 金魚にも夜の挨拶ライト消す
 引立てるライトアップや花三分
 干潟出でライトアップの夏はしゃぐ
 ひのき香のアロマライトや冴返る
 でで虫や山間に消ゆテールライト
 路線図のライトブルーの涼しさよ
 サイリウムライトとマスクの五千人
 罵声過ぎシテイライトを夜寒かな

来年
 来年へうれひのこして年暮れる
 来年は何ある年か日記買ふ
 マスクして来年の日記買ひにゆく

ライブ
 夏痩せの鼓動励ますジャズライブ
 椿咲く「松元ヒロ」のソロライブ

和
 年の暮炎の揺るる和蠟燭
 佗助や舌にとろける和三盆
 紙漉場絹めく和紙を積重ね

須賀 敏子
 鈴木多枝子
 森山のりこ
 早崎 泰江
 早崎 泰江
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 七郎衛門吉保
 赤座 典子
 篠田 大佳
 赤座 典子
 篠田 大佳
 篠田 大佳
 芝宮須磨子
 田中 藤穂
 田中 藤穂
 須賀 敏子
 須賀 敏子
 村松美智子
 松本 米子
 田中 藤穂

小さき子の和菓子喜ぶ初茶湯
 佗助やときには和服着てみたし
 和太鼓の天駆け昇る運動会
 和三盆口にとろける梅雨湿り
 やはらかな和紙に指切る神無月
 和蠟燭匂ふ神棚大旦那
 秋の朝口ソッジ和食派洋食派
 和臘梅そそけし芯の紅紫色
 竹落葉和食三菜木の器
 冬牡丹和紙で折りあぐ鏡獅子
 釣忍かかげ和菓子屋開店す
 和室に足まげて木の実をこぼしける
 冬紅葉和服婦人の裾さばき
 和三盆飾にかけて雛の菓子
 和洋折衷日本列島冬に入る
 和箆筒に形見の袷又しまふ
 白障子畳に坐る和の心
 蒲公英の萼に和と洋風任せ
 洋も和も蒲公英綿毛同じかな
 更衣和服リメイク母を着る
 時流る和音のやうに春ともし
 蓮の実が飛んで和服の父のこと
 花椿和服姿のモデルかな

松村美智子
 関口 ゆき
 松本 米子
 早崎 泰江
 関口 ゆき
 芝 尚子
 吉成美代子
 赤座 典子
 長崎 桂子
 長崎 桂子
 芝宮須磨子
 赤座 典子
 赤座 典子
 竹内 弘子
 長崎 桂子
 森山のりこ
 藤野 寿子
 藤野 寿子
 藤野 寿子
 東 亜未
 鈴木多枝子
 須賀 敏子
 須賀 敏子
 篠田 純子
 中川句寿夫
 須賀 敏子

あとがき

作品欄

作品欄の発表句数を変更いたします。五句より八句で
 ありましたが、三句より十句に変更いたします。深い意
 図はありません。『あを』は会員誌、会員諸兄姉の自由
 な発表の場としたく些かの変更です。また、既発表句で
 も改作されて再発表されたいときは可とします。

狭庭

わが狭庭も六月に入り活況を呈してきた。昨年庭の一
 隅を占拠してゐた帚草が全く姿を見せない。これからの
 のだらうか。代りに昨年は見なかつた藪草が生えてきた。
 他所では花を咲かせているがここでは赤茶けた葉を数枚
 つけただけでおとなしく他の草に紛れてゐる。来年この
 まま増えてくれればドクダミ茶にするのだが、増えすぎ
 て困るかもしれない。朝顔の苗が育たないなど近寄つた
 ら挿花が二本花を咲かせてゐた。うれしくなり一本根付
 きのままコップに入れ仏に見えるやうにした。旧居から

連れてきた鉢からこぼれた水引草が盛んに花穂を伸ばし
 てゐる。一番背丈があるのは桐(?)の幼木。道路脇の
 同種の木は私の背丈を越して伸びてゐる。ネット調べな
 ので本当に桐なのかは定かでないのだが、昨年はこの
 葉の上に精霊バツタが乗ってゐた。葉裏に蛹がぶら下
 がった。今年も何かとにぎやかな狭庭である。この庭に
 名前をつけるのも一興と思つてゐるが良い名が思ひつか
 ない。

居酒屋

夕方子供の帰宅をうながす放送が町に響くとこたつの上
 が居酒屋になる。
 テレビドラマで眞島秀和さんの『居酒屋新幹線』が放
 映された。録画して楽しんだ。ドラマは会社員の彼は地
 方の支店へ仕事で出かける。仕事の内容は覚えてゐない。
 日帰りの仕事であはたらしい。出かけた先で酒と魚を調
 達して帰りの新幹線で一杯やるといふ筋らしいものな
 いドラマであるがなぜか惹かれた。再放送があればまた
 見たい。わたしもわたしなりに動いてチャイムとともに

居酒屋が開店する。テレビではその時の気分で録画した
ものの中からチョイスして流す。酒種はその時の気分、
拘りはない。おつまみが足りないときは胡瓜を冷蔵庫か
ら出してそのまま味噌をつけて齧ったりと肴にも拘りが
ない。そんなこんなで気がつくところ三時間過ぎてお
る。呆れたものだ。

筆

自作を書くのが楽しい。過日、俳句の手引きをしてい
ただいた日本画家の遺品の筆を沢山いただいた。書の筆
もあるが絵筆が物珍しく楽しく書ける。自句を書くのは
推敲の時間でもある。先日この筆で遊んでいたら不思議
な感覚に陥った。この筆は何千回、何万回と画家の手の、
指の動きを知ってあるのだらう。その動きをふっと筆が
教へてくれてゐるやうな気になった。瞬間のことだが不
思議な体験をした。

展覧会の絵

「展覧会の絵」を聞き比ぶ赤寒の夜 赤座典子

典子さんの俳句にあるやうに、ムソルグスキーのピア
ノ曲「展覧会の絵」はさまざまな様式で演奏され人々に
親しまれてゐる。先日パイプオルガンでこの曲を聴いた。
前にも一度聴いてゐる。演奏者は廣江理枝さん。組曲の
最後に演奏される「キーフの門」が圧巻。パイプオルガ
ンの低音の効いた大音響はわたしのテレビでは何分の一
かの再現であるが、動画がそのあたりを補ってくれる。
泣くがごとき弱音部、全身で何かに向かって争ふやうな
鍵盤を押さへ込む指の震へ。録画はまだ消さ無いである。
(喜孝)

二〇二三年六月号

発行日 六月十七日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)